

町民参加の町史づくり



1992. 3. 31(火)

創刊号

竹富町史だより



竹富町史編集室

町長あいさつ	町史編集室設置と経過	町史編集委員会発足	町史編集調査協力委員委嘱	竹富町史編集基本構想	写真にみるわが町	文化財探訪	聖地めぐり	戦跡をたずねて	収蔵図書紹介	購入図書紹介	業務日誌	資料の提供お願い	編集後記
(1)	(1)	(2)	(3)	(4)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(14)	(16)	(18)	(19)

表紙の写真

西表西部の美田良にある田んぼへ田草を取るため出発する時のスナップ写真。除草機を前に婦人たちは全て 肌足。西表島は米どころで田植え、草とり、収穫と忙しい。写真は1941年(昭和16年)頃、撮ったもの。花城政子さんから提供を受けた。

「あいさつ」

竹富町長 友利 哲 雄

このたび「竹富町史だより」創刊号を発行することになりました。『竹富町史』は、先史時代から現在に至るまでの歴史を集成していくことをめざすものであり、文化事業の一環として取り組むことになりましたことを町民とともに喜びたいと思います。

本町においては、昭和四十九年に『竹富町誌』、同五十三年には『町制三十年のあゆみ・竹富町』を刊行していますがそれぞれの成果を踏まえ近年、発掘された史資料を活用しながら町民参加の町史づくりを基本方針に編集作業を進めております。町史編集は、とかく難しいイメージがありますが、可能な限り多角的に情報を収集し、聞き取り調査を行い町民本位の町史づくりに取り組んでいきます。

この事業を推進することにあたって、これまで企画課において、町史編集業務の準備作業を進めるとともに、平成元年二月に竹富町史編集委員会を発足しご協力ご指導をいただいております。平成二年には町史編集室を旧庁舎三階に設置し、本格的な編集業務のスタートになりました。

申し述べるまでもなく本町は、県内でも最も雄大な海、山、川等に恵まれた大自然の環境にあり、わが国最南端の町であります。私達の祖先がこの美しい自然と調和しながら着実に歴史を創り、今日の基礎を築いてまいりました。長い歴史の中でいろいろなことがありましたが、ひるがえって現在を見つめていくとき、心の豊かさが要求されている昨今、いつかきた道をふり返り、将来を考えつつ未来を見つめ展望していくべく「竹富町史」を編集刊行していくことは、最も肝要であり意義深いことであると思います。

そのためには、町民が積極的に参加し、語り、成果を証として町民に反映できれば、理想的な町づくりができると考えま

す。

もとより、本事業は町民と行政が一体となり、竹富町に過去と現在との対話の中から未来に向けたメッセージを記すことによりまちづくりの一助にもなります。

この文化事業は、一朝にしてできるものでなく、地味で息の長い作業であるがゆえに町民のご理解とご協力が必要不可欠であり、『竹富町史だより』が町史づくりの糧となるよう祈念して発刊のごあいさついたします。

平成四年三月

町史編集室設置と経過

竹富町史編集事業の重要性に鑑み、昭和六十三年の町制施行四十周年記念文化事業の一環として、町史編集事業に取り組むことになりました。これまで企画課

において、町史編集業務担当の兼務職員が配置され業務の準備作業が進められてまいりました。その間、平成元年に町史編集委員会規則を制定し、同年二月に竹富町史編集委員十九名が委嘱され二回の編集委員会を開催し、竹富町史編集基本構想、基本計画等の審議を経て同案が承認されました。

この町史編集事業を強力に推進するために平成二年に町史編集室（旧庁舎三階）が設置され職員も配置して本格的なスタートになりました。同年十月には、第三回編集委員会を開催し竹富町史第十巻資料編の章立要項等について審議を経ました。編集室では、編さん作業を進めながら書籍の購入、沖縄県立図書館所蔵の古新聞資料（琉球新報・明治三十一年～大正七年）（八重山毎日新聞・昭和二十五年～昭和四十一年）（八重山群島測量図・明治三十三年）村日記（竹富村事務所・明治三十一年～明治三十七年）等、さらに琉球大学付属図書館所蔵マイクロフィルムからの宮良殿内文書の複製本の収蔵また、他市町村における編集業務の実

情調査や関係機関への刊行物の寄贈の依頼など行っています。

編集作業を町民参加のもとに進めるため、各地区に編集調査協力員十五名を委嘱配置し、編集業務で資料収集のご協力をいただいております。平成三年二月には、編集委員全員の任期満了に伴い（一人を除く）全委員が再任された。引き続き第三回目の編集委員会を開催。写真集『写真にみる竹富町のあゆみ』の章立要項等の審議をしました。また、編集専門小委員会を開き資料編「新聞集成」発刊要項等の検討をしてもらいました。

町史編集室では、新聞資料で戦前発行された「琉球新報」等からの町関係の記事探索、古写真の収集作業を行っております。

古写真は、郷友会へ、文書で協力依頼をするとともに、町内各地でのローラー作戦を展開、各家庭にある写真の掘り起こしに努めております。新聞集成と写真集の発刊に向けて全力投入を行い、現在に至っております。

町史編集委員会の発足

「竹富町付属機関設置条例」（昭和五四年六月十五日、条例第十六号）二条の規定に基づき「竹富町史編集委員会規則」が平成元年一月九日に制定されました。編集委員会の所掌事務は、町長の諮問に応じ①町史編集に関する基本的大綱に関する②町史編集に関する調査及び資料収集に関する③その他町史に関すること、となっております。

編集委員会は、二十名以内の委員で組織され現在、十九名の委員が委嘱または任命され、活躍しております。委員は、学識経験者、町職員、その他町長が相当を認めた者一となっており歴史に詳しい専門家がかりです。編集委員長の當山哲男氏は、初代元企画課長で、郷土史研究をされております。

竹富町史編集委員

◎印は委員長
○印は副委員長

◎ 當山哲男	元竹富町企画課長
○ 西里喜行	琉球大学教育学部
加治工真市	沖縄県立芸術大学
大城 学	沖縄県立博物館
篠原武夫	琉球大学農学部
西島信昇	琉球大学理学部
池城安伸	石垣第二中学校
黒島精耕	伊原間中学校
三木 健	琉球新報編集局
玉城功一	八重山商工高等学校
石垣久雄	八重山高専学校
新本光孝	琉球大学農学部
山盛 直	琉球大学農学部
石島 英	琉球大学(短大)
本成善康	元教育事務所長
阿佐伊孫良	東京中央郵便局
上江洲儀正	南 山 舎
登野原 武	竹富町教育委員会
安里碩八	竹富町役場

町史編集協力委員の委嘱

「竹富町史編集委員会規則」(平成元年一月九日、規則一号)第十一条の規定に基づき「竹富町史編集に関する要綱」(訓令)が施行されました。調査協力委員は、要綱の中で町長が委嘱することになっており現在、各地区一名の計十五名が、町史編集作業に協力しております。委員は、①学識経験を有する者②町史編集委員が推薦する者から委嘱されました。

〈編集室メモ〉

町史編集室では、写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」発刊に向けて写真収集を行っています。写真はこれまで約三千枚に達しました。その中から選択して昨

町史編集調査協力委員

上勢頭芳徳	竹富
松竹秀文	黒島
前泊竹宏	小浜
安里真吉	新城
大舩久信	大原
玉盛淳則	豊原
大谷用次	大富
新 初蔵	古見
富本 勇	美原
銘里長善	上原
前大用裕	西表
西 永祐	白浜
井上 文吉	舟浮
通事建次	鳩間
新城永佑	波照間

年十二月一日、二の両日、町離島振興総合センターで第一回写真にみる竹富町のあゆみ展を開き、好評を得ました。写真は複写し、収集しておりますが、どれも貴重なものばかりです。今後、各地区での写真展を計画しています。

竹富町史編集基本構想

はじめに

日本列島の南端部、紺碧の大海を東シナ海と太平洋にわかつ琉球諸島、そのうち一六一島から構成される沖縄県の島々は、その地理的条件の故にこれまで幾度か歴史の狭間で翻弄され非情な犠牲を強いられてまいりました。古くは琉球国時代の薩摩藩の侵入と支配、そして去る未曾有の太平洋戦争の惨禍と二十七年に及

ぶ米国軍による統治などいずれも重苦しい刻印を長く県民に焼き付け、戦災による苦悶の火種をいまなお県内に宿し続けております。

かかる状況の中で沖縄史に対する研究熱はその史的特異性もあって戦後世情の落ち着きとともに高まり、戦前の皇国史観や王朝史観など王権神受、個人崇拜の偏狭な史観を排除した民衆に依拠する科

学的視点からの研究や編集事業が進められ、今日までに数多くの成果が生み出されてまいりました。

このような沖縄史の研究、編集事業と相まって、県内各市町村においても、住民の参加と協力のもとに自らの地域史の発掘と編集事業への取り組みが積極的なされ、次々とすばらしい市町村史の刊行を見るに至っております。こうした地域史づくりの機運を背景に本町も町民の町史編集事業推進の要望にこたえ、文化行政の一層の拡大と強化を図る立場から平成元年二月二日竹富町史編集委員会を発足させました。

竹富町史編集の意義

「歴史とは現在と過去との対話である」と、歴史哲学者E・H・カーはその著書で繰り返し述べていますが、日本の最南端に位置する十六の島嶼（うち九つの有人島）、その点在する島々を生活の場としてきた私たち竹富町の祖先はどのよう

な形で自然とかかわり、自からの暮らしを保ちながらどのように社会生活を営んできたか、そして連綿と続いてきた長い

もまたよく理解しうる鍵を得ることでもあります。

歴史過程でさまざまな苦難に遭遇しつつも、それを克服して独自の文化を創造し今日を築いてきたか、現在に生きる私たちは、このような竹富町の歴史を担い創造してきた祖先の過去と対話し、先人が歩んできた足跡を明らかにすることによって、次代にその歴史を引き継いでいかなければならない責務と使命を有しております。それは、とりもなおさず過去の竹富町の歴史を通していま置かれている私たちの立場にスポットをあて、未来を展望しつつ私たちの可能性を伸ばしていく史的作業への参加にほかならず、先人が背負ってきた歴史的な課題、その克服への努力と日常生活のあり方など、歴史を動かしてきた要因やエネルギーを探索し解き明かす中で、今日私たちが受け継いできた文化（民俗・言語・民話・伝承等）、戦争体験・開拓移民の記録など過去のいろいろな歴史的事象を、現在の目を通して見るにより理解し、現在の事象を

私たちは、たえず過去を呼び起こすことによって現在を見つめ、歴史のもつ普遍性を浮き彫りにすることによって、未来を地球的広がりをもって客観的にとらえ、今後どうあるべきかを考える拠り所とする必要があります。そして現に存する私たちの地域事象をあらゆる面から一つ一つ科学的に積み重ね自らの地域史を作っていくかなければなりません。

戦後、歴史学はきわめて高い科学的方法で研究が進められるようになりましたが、しかしそれは日進月歩の速さで進む生活の近代化や、マス・メディアの大量かつ高度化された情報を反映した経済的、社会的諸構造に依る研究が中心をなし、地域史および民衆史の研究については、一部に研究成果を見るに至るようになってはきているものの、その取り組みや研究方法において、まだまだ遅れをとっているような感じがします。

それは、八重山史においてもいえるこ

とであり、先覚の実績に学んでこれまでいくつかの八重山史の研究成果が発表されてはおりますが経済的、社会的分野をはじめ各分野における史的研究、民衆史の研究等、まだまだ埋もれている多くの史実の発掘・調査・研究が待ち望まれています。

したがって私たちは、時々刻々と現在が未来に食い込む中で新しい過去をつくり、歴史を重ねている現在に生きる者の当然の責務として先覚の衣鉢を引き継ぎ、まだねむっている史実を掘り起こし、科学性に裏打ちされた八重山の、そして竹富町の地域史、民衆史を研究し、その実をあげていかなければなりません。

そこで竹富町としては、他の市町村史編集事業への取り組み等を参考に、またその研究成果に学びながら、本町の各島、各集落、そしてそこで生活してきた人々を座標軸とした竹富町史を、広く世界史的視野から練りあげ、科学的視点に立った学術性の高い歴史、文化事業の集大成として編集したいと考えております。

竹富町史編集の基本的目標

竹富町史は、竹富町民の歩んできた道程、その社会的変遷、発展の経過を明らかにし、それをつづるものであり、そのあるべき姿勢、望ましい目標は、地域に依拠する町民の生活史を紡ぎ、明日を切り開いていく町民の期待にこたえるものでなければなりません。

そこで竹富町史編集にあたっては、次のとおり基本目標を定めます。

- 一、町民一人一人の町史となり、かつ親しみのもてる町史をつくる。
- 二、町民が誇りとし精神的、文化的資産となりうる町史をつくる。
- 三、地域に根ざした町史をつくる。
- 四、町民の現在と将来の活動の糧となる町史をつくる。
- 五、町民の参加と協力による文化活動の一環としての地域史づくりとする。
- 六、未来の検証に耐えうる町史をつくる。

竹富町史編集の基本的な方法

竹富町史は、編集基本目標にそって、次のとおり基本的編集方法を定めます。

- 一、科学性に立脚した町史編集に努める。
- 二、現在の歴史研究の水準を踏まえ、更に研究の水準を高めるよう努める。
- 三、数多くの史実を具体的に掘り起こすよう努め、その史実を綿密な考察にもとづいて編集する。
- 四、史（資）料の調査、収集を徹底的に行い、その保存と効果的な活用を図り、実証の積み重ねをする。
- 五、個別研究の積み重ねと総合的な把握にもとづいた編集をする。
- 六、創意と工夫を凝らし、きめこまかい叙述と平易な文章による編集に努める。

七、竹富町全域を町史編集の対象とするが、編集に当たっては八重山全域をはじめ広い視野からの研究、考察を重ねる。

八、地域の特性と史的発展の経過を重視し、多面的かつ総合的な検討を加え、史的形成の過程を明らかにする。

竹富町史編集の基本的篇別構想

竹富町史は、大別して通史篇、各論篇資料篇とします。

通史篇は、先史時代から現代に至るまでの歴史の流れを総括的にとらえ叙述するものであり、各時代の祖先の生活のありさまなどを町全体の立場から、各論の成果に立脚して系統的に構成編集します。各論篇は、自然（地理）、地誌、考古、埋蔵文化財、民俗、言語、政治、社会、産業、経済、教育、文化等々を含め、一目で島の歴史がわかるように各島別に篇別し、町民はじめ一般的に広く利用されやすいように分冊編集を構想しています。

資料篇は、町民が祖先の歩んできた歴史を確かめ、探究する生きた素材として活用できるようにその保存、編集には可能な限り原形をそこなわず、創意と工夫

を凝らしできるだけ多くの資料を精選収録します。

この資料篇の刊行は、町史編集事業の根幹をなすものとして大きな比重を占めてまいります。

その資料篇には「新聞資料集成」「近代文書」「近代文書」「諸家家譜」「戦時記録」「行政文書」「統計」等があげられ分冊による篇別を構想しています。

そのほか、いま一つ重要な仕事として聞き書きによる資料の作成があり体験者、古老などからの聞き書きを、資料篇刊行の一環として進め、加えて「竹富町史跡地図」や「竹富町史年表」「竹富町写真集」等の作成も検討しています。

むすび

竹富町史編集事業は、長期間にわたる文化事業となりますが、この事業をのり多い事業として推進していくために、次の諸点に留意して作業に取り組みます。

①「竹富町史」を町民の町史として、町

巻別	編別	発行年
第一巻	通史編(全)	平成十五年
第二巻	竹富島編	平成八年
第三巻	小浜島編	平成九年
第四巻	黒島編	平成十年
第五巻	新城島編	平成十一年
第六巻	鳩間島編	平成十一年
第七巻	波照間島編	平成十二年
第八巻	西表島東部編	平成十三年
第九巻	西表島西部編	平成十四年
第十巻	資料編・前近代、近代	平成十五年
〃	資料編・新聞集成(1)	平成十五年
〃	資料編・新聞集成(2)	平成十八年
〃	資料編・戦争体験	平成十六年
〃	資料編・社会編、産業	平成十七年
〃	資料編・郷友会	平成十七年
別巻①	通史編・総索引	平成十六年
別巻②	竹富町関係文献目録	平成二年
別巻③	写真集	平成四年

民自らが理解し参画する意味をもこめて各島各地域の「集落史(仮称)」づくりを地域住民が主体的に取り組み発行するよう地域史づくり運動を推進する。②「竹富町史」編集事業の取り組み状況や各種情報の提供、交換の場としての町史だよりと併せ、町史編集に資する歴史、

文化に関する研究論文を収録する紀要的広報を刊行する。③各種地域史関係機関、関係研究団体との連携を深め、町史編集事業の研究成果を上げる。④史(資)料展、研究史展などの展示会や地域史講座を開催し、町民の理解と参加を深めていく。しかし、この町史編集事業が多く成果をあげるために何よりも重要なことは、行財政面における十分な配慮と対応が必要であり、町民の理解と協力が不可欠であるということです。私たちは、現在の生活と環境をより豊かにするための努力も必要ですが、未来へ向けた豊かなふるさと創造への取り組みのためにも「温古知新」の箴言のごとく祖先が蓄積してきた文化遺産を記録しその足跡を明らかにしていくなかで明日を切り開いていく責務もまたあります。それはまた次代の竹富町を創って行く人々に対しての私たちの大いなる使命であるとともに、彼等へのこのうえない大切な贈り物でもあります。それだけにこの竹富町史編集事業は町民の力を結集して進めなければなりません。



《写真にみるわが町》

鳩間のカツオ漁

八重山のカツオ漁は、昭和四十年代まで島々で営まれていた。鳩間島は、周辺海域が漁場、ということもあり、明治期に八重山で初めて入漁が行われた。沖繩本島では豊富な水産資源をもつ好漁場として知られていた。

鳩間のカツオ漁は、関係者によると一九〇五年（明治三八年）糸満町の玉城保太郎等の組合の漁船が入漁したのが最初、といわれる。島の人たちが独自にカツオ漁をするのは、一九〇九（同四二年）前後と推察される。漁船は、当初帆船で、以後発動機船へと切り替わった。「先嶋新聞」の一九一八年（大正七年）六月五日付紙面に「就漁鯉船調」が掲載されている。同紙によると鳩間島は初福丸（機船）十六馬力、太田守恒、銀栄丸は（帆船）浦崎英行、仲得丸（帆船）は仲底真那の三隻が見える。漁場は、鳩間、波照間、平久保沖合だった。漁獲高は、初福丸は、七月に出漁二十七日、二千七百二十八匹・一万九千四百三十三半斤となっている。島のカツオ漁は戦前、株組織をつくり三、四隻操業していた。戦時中は、休業したが、戦後に復活。写真は、一九五九年（昭和三十四年）にカツオ節を製造する光景を撮影したものである。カツオ漁業は、最盛期に七、八隻いたが一九六八年（同四十三年）には、消滅。島の経済を潤していたカツオ漁は六十三年間に及ぶ歴史に終止符を打った。

花城井戸



跡発掘調査に関連して雑木類が伐採され、長い眠りから目覚めた。

「花城井戸」は、島では、ハナクンガーと呼ばれる。島には、数多くの御嶽があるが、井戸は由緒深い六山（ムーヤマ）のひとつである花城御嶽の祖神で知られる他金殿が掘った、と伝わる。

他金殿は、島で最も早く渡来した権力者で知られ島立に由来する神、として祀られている。島の祖神は、いずれも北方から渡って来ており、その地域の神を勧請して、祈願の対象としている。井戸は花城御嶽、花城村と関連が深い。伝説によると村は、古くは、御嶽近くに広がっていたが、新里村の移転に伴い井戸の近くに設けられた。

井戸は、ウリカー（降り井戸）型式になっており、降り口には、香炉が置かれている。香炉の後ろには、石碑があり「花城井戸」と刻み込まれている。井戸は古くから住民に親しまれ、正月に使う若水などに利用されていた。また、島外にでた島出身者が帰省した時、必ず井戸に行き感謝祈願を捧げていた。しかし島

は、過疎化が進み、井戸周辺は、雑草木が覆い始め、井戸に通う道も閉ざされてしまった。

島に住む人々によると一九五〇年過ぎ頃まで道路は開かれ、井戸への往来も自由だった、という。しかし住民の島外への人口流出が、井戸との結びつきを弱め、荒れ放題に雑木が茂り、次第に人々の足を遠のかせてしまった。新里村遺跡発掘調査に関わり、歴史の中から呼び起こされ、今では、気軽に訪れることもできる。

島人の井戸に対する思いは強い。小さい島の人々が、昔からどのように水と関わってきたのか、を追想する時、井戸の重要性が分かるう、というものだ。井戸は再び、その全貌を現したが、底に積っている土砂を除去した時、その中から甘水が湧きだした。水は、今でも底にたまっており濾過すると、十分に生活水としても使えそう。井戸の東西には、新里村跡が広がり、遺跡の中から八重山式土器のルーツと思われる滑石製石鍋模造土器などが出土。十二世紀～十三世紀の集落跡も検出された。

《聖地めぐり》

白郎原御嶽



沖縄全域の御嶽を記した『琉球国由来記』二十一巻に掲載されている波照間の御嶽である。島では「シィサバルワー」と

呼ぶ。御嶽は「オタケ」「ウタキ」などと読まれるが、八重山では「ウガン」「オン」が一般的な呼称である。

波照間では、「ワー」という。島の方言で豚のことを「ウワー」というが、明確に発音しないと、御嶽が豚になりかねない。微妙な発音だが一歩、誤ると予測しない方向へと解釈されてしまう。

波照間島は、久高島と同様に「神の島」といわれる。祭祀行事が多いことのほか、神秘的な島の雰囲気にも共通性があるからだろうか。「島は、農業を一本の軸として営まれるとともに、祭祀をもう一本の軸としている」と表現されるが、まさにその通りである。島を歩いてみると、大木の根っこ、大石の近くには香炉が置かれ祈願の形跡がある。

八重山は群雄割拠の時代（十五世紀中期～後期）、島々に英雄がおり勢力を競っていた。波照間を拠点にしていたのが明宇底獅子嘉殿である。獅子嘉殿は、結局琉球王府に味方したため、オヤケアカハチにより殺害されてしまうが、王府は、三人の息子を島の最高役人に任命した。

白郎原御嶽を拝み初めたのが、次男で新本与人を拜命されたコマヤである。同御嶽では真徳利、阿幸侯御嶽とともに「ピテヌワー（野原の御嶽）」と呼ばれる。島には、五集落に、それぞれ御嶽があるが、これは「ウッチヌワー」といわれる。「ピテヌワー」が本御嶽で「ウッチヌワー」は、神通しの遙拝御嶽の性格を有している。神名は、嶽名と同じ。御イベ名はキヤウモンカイ。上空から島を眺めると、森林が一面に広がっている場所が御嶽である。

白郎原御嶽は、ほかの二御嶽と同様に鳥居、拝殿、香炉はなく神体だけである。祭祀には線香がたてられずニンニク、塩、神酒が供えられる。原始的な形態をとどめている御嶽である。御嶽への入域は、通常できず、年三回のミヨクツエの時に限られる。御嶽には、巨大な鍾乳洞がある。

神司は、船附ヨシさん。遙拝御嶽の新本御嶽の神職も務め、神行事を執り仕切る。

忘 勿 石



西表島の南風見田海岸に「忘勿石（わすれないうし）」が、刻み込まれている。戦争マラリアを語るシンボルとして今、郡内外から注目を集めている。同石には悲惨な戦争の歴史がある。

八重山の戦争は、マラリアを抜きにし

ては、語れない。太平洋戦争の末期、波照間の住民は、「軍命」により西表島への強制疎開を命じられた。西表島は、当時、マラリア有病地帯で疎開は、石垣島に駐屯していた独立混成団第45旅団（宮崎武之少将旅団長）と諜報活動のために島に

派遣された特務兵によるものだった。波照間住民の疎開先は、南風見田海岸。ここで数多くの人々が、マラリア禍に苦しめられ、死んでいった。子どもたちは十六人が幼い命を落とした。「忘勿石」は、一九四五年当時、波照間国民学校長だった故・識名信升氏がマラリアで亡くなった児童らを悼み、痛恨の思いで彫ったもの。砂岩の上には「忘勿石 ハテルマシキナ」の十文字が浮かび上がっている。「波照間人たちよ、この悲しい出来事を永遠に、忘れることなかれ」との識名校長の訴えがある。

「忘勿石」のある場所は、岩場になっている。そこは、児童生徒の学び場、青空教室だった。空襲時には、隠れる岩穴もある。「忘勿石」は、識名さんが多くを語らないこともあり戦後、ひっそりと歴史ベールに覆われていた。

「忘勿石」が南風見田にあることが分かったのは一九五五年（昭和三十年）。豊原に住む保久盛長正さん（六二）が識名さんから同石のことを知らされ、確認して明らかになった。

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人・関係機関等

から寄贈を受けております。

あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
山城善三	沖縄県史(一巻～二十二巻)
"	宮古島旧記並史歌集解
"	南島神話と民俗
"	沖縄農民史
"	沖縄の社会と宗教
"	沖縄の伝統文化
"	外間守善・沖縄の言語史
"	琉球舞踊の記録
"	沖縄民芸の記録
"	八重山の明和と津波
"	登野城村の歴史と民俗
"	八重山芸能と民俗
"	伊波普猷選集(上・中・下巻)
"	比嘉春潮全集(一巻～四巻)
"	八重山スポーツ史
"	八重山要覧(一九六四年)
"	八重山要覧(一九六九年)

大城学

山城善三	沖縄県立博物館紀要 第七号
"	南島考古 第五号 一九七七年
"	沖縄の文化財
"	沖縄の組踊り(Ⅱ)
"	図録沖縄の古窯 一九七九年
"	特別展美術工芸の美を求めて
"	戦後沖縄の文献解題
"	琉球植物誌
"	沖縄の民芸
"	沖縄救済論集
"	離島雑纂
"	童景集
"	沖縄風土記
"	民謡覚書
"	琉球諸島風物詩集
"	貿易要覧
"	芸術祭要覧
"	古琉球
"	中山伝信録
"	西表炭坑史料集成 (六十冊)
"	ある離島教師の白書
"	南島流転
三木健	南島 第一輯

三木 健
佐藤 金市
瀬戸 弘
上勢 頭亨
慶田 盛正光
運道 武三
石垣市史編集室
浦添市教育委員会
名護市役所
座間味村役場
伊是名村役場
本部町役場
北谷町役場
宜野湾市役所
読谷村役場
国頭村役場
中城村役場
平良市役所

西表炭坑覚書
西表炭坑自筆原稿(五十六冊)
竹富町の島々と共に
琉球法令集 (他、一四五冊)
竹富島誌 民話・民俗編
竹富島誌 歌謡・芸能編
島に生きる
黒島誌
石垣市史 資料編新聞集成第一卷
石垣市史 資料編新聞集成第三卷
市民の戦時戦後体験記録
第二集・第三集・第四集
浦添市史 (第二、第六卷)
名護市史 (資料編一、三卷)
座間味村史 (上・中・下巻)
伊是名村史 (上・中・下巻)
本部町史 (資料編一、二卷)
北谷町史 (第二、四、六卷)
宜野湾市史 (第二、七卷)
読谷村史 (第二卷上・下)
国頭村史・国頭村史(別冊)
中城村史 別巻一新聞集成編
平良市史 (第一、三、五卷)

沖縄県町村会
琉球銀行
八重山支庁
石垣市役所
阿佐伊孫良
大原中学校
地方人事調査会
斜里町役場
豊原公民館
東海大学
八重山芸能研究会
地域史協議会
南島文化研究所
沖縄市教育委員会
宮良高司
波照間民俗芸能
保存会
那覇市役所
沖縄県議会
通事 健次

沖縄戦後選挙史
戦後沖縄経済史
八重山要覧
市政のあゆみ
『たけとみ』創立六十周年記念誌
創立四十周年記念誌
県史
斜里漁業史
開拓三十年
東海大学 海洋学部二十年史
東海大学 海洋学部 紀要
(第十二、十六、二三、二五号)
八重山芸能と私たち (疏大)
シンポジウム・南島の墓
宮古下地町調査報告書一(沖国大)
沖縄市史 第八号
ふるりの土
—石垣島の農民史的自伝—
波照間島のムシャーマ
那覇市史 通史編 第二巻
沖縄県議会史 第八・九巻資料編
鳩間島誌 (コピー)

購入図書紹介

多数の図書を購入して
いますが紙面の都合上そ
の一部を紹介します。

編筆者名	図書名	発行所名	稲村賢敦	宮古島庶民史
琉球政府文教局	琉球資料(第一~第十集)	那覇出版社	浦添市史	写真にみる浦添のあゆみ
沖縄タイムス社	沖縄美術全集(一~六集)	沖縄タイムス社	編集委員会	宮良文庫(一~三十巻)
宮良泰平	八重山方言の素姓	宮良作三	下嶋哲郎	沖縄聞き書きの旅
多和田真助	門中風土記	沖縄タイムス社	山城善三	おきなわのふるさと竹富島
牧野清	八重山のお嶽	あーまん企画	上勢頭亨	
亀井秀一	竹富の歴史と民俗	角川書店	伊波普猷外二名	琉球国由来記
牧野清	新八重山歴史	牧野清	宮良當壯	宮良當壯全集(一・二・七 十八・二十・二十一巻)
岩崎卓爾	岩崎卓爾一卷全集	伝統と現代社	沖縄タイムス社	沖縄大百科事典(三巻別巻)
星城信勇	西表島の民俗	友古堂書店	小野武夫	近世地方経済史料(十巻)
宮城信勇	八重山ことわざ事典	沖縄タイムス社	喜舎場永珣	八重山民俗誌(上・下巻)
琉球政府	石垣島の氣候	琉球政府	須藤利一	南島覚書
八重山文化研究会	八重山文化論集第二集	ひるぎ書房	真栄城守定	八重山・島社会の風景
石垣島測候所	石垣島気象災害資料	石垣島測候所	南風原英育	南の島の新聞人
与那国善三	西塘傳	西塘会	前花哲雄	八重山の歴史と民俗
上勢頭亨		田名真之	南島地名考	
宮川寛雄	芸能の島・八重山	外間守善	沖縄文化研究(五巻)	
慶世村恒任	宮古史傳	南陽印刷	下野敏見	南西諸島の民俗
				刊々堂
				竹富公民館
				沖縄文化
				第一書房
				沖縄春秋社
				風上社
				第一書房
				沖縄タイムス社
				吉川弘文館
				沖縄タイムス社
				第一書房
				ひるぎ社
				ひるぎ社
				前花哲雄
				ひるぎ社
				法政大学出版局

市川重治	南島針突紀行
真栄城守定	沖縄地域開発
大城常夫	地域発展と組織化
島袋邦	論集・沖縄の政治と社会
外間守善	郷土史料目録
河村只雄	沖縄資料センター目録
白井祥平	南方文化の探究
又吉盛清	統・南方文化の探究
田代安定	沖縄有毒生物大辞典
仲若直子	日本植民地下の台湾と沖縄
天野鉄夫	沖縄結縄考
池宮城秀意	紅を抱いて
野底宗吉	植物方言集
本田安次	戦争と沖縄
山城浩	節祭シラバ集
前花哲雄	南島採訪記
木崎甲子郎	小浜島誌
司馬遼太郎	三十八度線と二十八度線
沖縄考古学会	琉球の風水土
新里恵二	街道をゆく
小川徹	石器時代の沖縄
外間守善	沖縄文化論叢 一巻
	沖縄文化論叢 三巻
	沖縄文化論叢 五巻

那覇出版社	金城盛正	ふるさとの祭り(写真集)
ひるぎ社	仲間勇栄	沖縄林野制度利用史研究
ひるぎ社	嘉数啓	島嶼経済論
ひるぎ社	仲地博	沖縄の自治と自治体
法政大学出版局	琉球新報社	新琉球史
沖縄文教出版	南島昔話叢書	竹富島・小浜島の昔話
沖縄文教出版	座間味庸真	満寿の森に立つ
新星図書出版	伊是名憲二	沖縄民俗(二四号)
沖縄あき出版	崎原久	人物・八重山編
至言社	宮城栄昌	沖縄歴史地図
琉球真珠社	玉城憲文	竹富島仲筋村の芸能
新星図書	高良鉄夫	琉球の自然と風物
岩波書店	小野紀之	ヤマビカリヤーの島
	山田武男	わが故郷アントウリ
	渡辺良正	沖縄先島の世界
明善堂書店	星津男	西表島の村落と方言
小浜島郷友会	時利典	ユーナの国 八重山の世界
美栄橋印刷	田中利典	秘境西表島
築地書館	新城俊昭	南ぬ島旅情
朝日新聞	新川明	新沖縄文学(二六・二九)
新星図書	太田良博	異説・沖縄史
平凡社	大藤彦	沖縄文化論叢 二巻
平凡社	外間守善	沖縄文化論叢 四巻
平凡社	島尾敏雄	島尾敏雄非小説集成

ひるぎ社	琉球新報社	同朋社	座間味庸真	琉球大学	沖縄出版社	柏書房	オリジナル	文教図書	ひるぎ社	ひるぎ社	木耳社	友古堂書店	新星図書	那覇出版社	沖縄タイムズ社	月刊沖縄社	平凡社	平凡社	冬樹社
------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	------	------	-----	-------	------	-------	---------	-------	-----	-----	-----

業務日誌

計画の策定について（承認）。

六月十六日

一九八九年第一回沖繩県地域史協議会研修会に前鹿川参加（南風原町で開催一八日まで）。

八月二二日

一九八九年第二回沖繩県地域史協議会研修会に銘里、前鹿川、大浜、参加（竹富町離島振興総合センターで開催。二十六日まで）。

十一月二七日

町史編集専門小委員会開催。議題・資料編の取組みについてその他。

■一九九〇（平成二）年

三月二四日

竹富町課設置条例で「町史編集室設置」。

三月三十日

竹富町関係文献目録刊行（二〇〇部）。

六月一日

町史編集室、看板設置式（大川一〇番地で）。

六月二日

町史編集室（事務局）移転（美崎町十一番地から大川一〇番地へ）。

六月三〇日

一九九〇年第一回沖繩県地域史協議会研修会に安里参加（北

■一九八八（昭和六三）年

四月一日

竹富町史編集委員会設置条例制定。

四月二一日

町史編集業務に関する先進町村視察研修・資料収集のため（嘉手納町・北谷町・読谷村、前鹿川勇二十三日まで）。

■一九八九（平成元）年

一月九日

竹富町史編集委員会規則制定、企画課に町史編集担当係長（兼務）配置。

二月二日

竹富町史編集委員会へ委嘱状交付。第一回町史編集委員会開催、議題・①役員選出・町史編集委員長當山哲男氏・副委員長西里喜行氏選出②町史編集基本構想・基本計画の策定について（提案）審議。

四月二八日

第二回町史編集委員会開催。議題・町史編集基本構想・基本

中城村で開催。七月一日まで。

九月十日

一九九〇年第二回沖縄県地域史協議会研修会に安里参加（座間味村・離島総合センター十三日まで）。

十月九日

第三回編集委員会開催、議題・第十巻資料編章立要項等について。

十一月七日

沖縄県立図書館、先進市浦添市立図書館沖縄学研修室（視察研修。資料収集のため安里出張八日まで）。

十二月一日

宮良殿内文書（古文書）マイクロフィルムからの複製本三十冊収蔵。

十二月二十八日

町関係行政文書等収集（書類保存箱五十個）。

■一九九一（平成三）年

一月十四日

町史編集調査協力委員委嘱状交付（十五名）町民参加の町史編集についての説明会及び写真収集を依頼。

二月一日

任期満了に伴い町史編集委員に辞令交付、第四回町史編集委員会開催。議題・(1)町史編集委員長、副委員長の選出及び専門小委員会の構成について（前回と同じく委員長當山哲男氏

副委員長西里喜行氏）(2)写真集『写真にみる竹富町のあゆみ』章立要項等について。

二月二十五日

町史編集室の職員増について（要望）提出。あて先、町長及び議会議長へ（町史編集委員長名で提出する）。

三月五日

八重山毎日新聞社保存の（昭和四九年～平成二年三月まで）新聞資料収集のため、新盛、登野原出向（四日間）。

三月九日

沖縄県地域史協議会総会及び研修会に安里、登野原参加（今帰仁村にて開催十日まで）。

三月三十日

図書購入、八重山民俗誌外四九冊収蔵。

五月三〇日

図書購入、西表島の村落と方言外七冊収蔵。

六月一日

波照間地区、町史調査協力委員辞任に伴い新城永佑氏に委嘱状交付。

六月三日

石垣市在竹富町出身黒島郷友会（外七地区）会長あて、町史編集事業に対する写真資料の提供について協力依頼文書を発送。

六月四日

新聞資料「琉球新報」明治三十一年～大正七年九六冊「宮良

用庸家文書」（古文書）三冊影印複製本沖縄マイクロセンターへ発注。

六月十日

・喜舎場家文書（古文書）古新聞（八重山関係）原本所蔵者喜舎場氏と（琉大で）複製許可交渉及び先進市町史業務視察（具志川市、西原町）。

・西表炭坑関係写真一九九枚寄贈。三木健氏（琉球新報編集局次長）安里、通事出張。

六月一七日

八重山古地図（明治期の村絵図81枚）の複写許可について、社団法人温故学会々長斉藤政雄氏へ文書発送。

六月二一日

沖縄県地域史協議会、研修会・合評会「地域史における写真集」安里、新盛参加（具志頭村二三日まで）。

七月十日

八重山古地図（明治期の村絵図81枚）を原本所蔵の石垣市からネガフィルムを借用し、プリントする。

七月十八日

西表炭坑関係、故佐藤金市氏『手記・体験記』自筆原稿五六冊の贈呈式を町長室において行う、長男佐藤嘉一氏から。

七月十日

第三回沖縄県地域史まつり、民俗関係の写真出版と民俗芸能のビデオテープ提供、安里参加（浦添市で開催）。

九月二日

発注中の新聞資料『琉球新報』影印製本九六冊、『宮良用庸家文書』三冊、沖縄マイクロセンターより納品。

資（史）料の提供お願い

竹富町史編集事業は、町の文化的事業の一環として、町民の参加と協力による町史づくりに努めております。町史編集は、私達の先祖が歩んできた足跡をあらゆる角度から捉え明らかにし、貴重な文化遺産を後世に伝え、町民の現在と将来の活動の糧となる町史発刊を目指すものであります。

当町史編集室では、町史基本構想及び基本計画に基づいて編集作業を進めておりますが、よりよい町史を作るには色々な資（史）料が必要となつてきます。編集室設置以来、資料収集に努力してまいりました。だが古文書および古写真資料は、わずかしか収集されておられません。収集された写真は一部、町広報紙のほか地元新聞に連載し、喜ばれております。地域では、埋もれている貴重な資料が家庭にあると考えられます。

今一度書棚類や写真帳を見ていただき明治、大正、昭和に及ぶ古い書類、書籍、古写真を保存している方は、提供または借用させて下さい。書類等につきましてはコピー、古写真については複写して、速やかに返却致します。資（史）料の提供および情報について、当編集室までご連絡をお願い申し上げます。

編集後記

▼『竹富町史だより』創刊号を発行することができました。まさしく産む難しさ、辛らさ。平成三年度発行を目標、としていましたが編集への取り組みが遅れ、今になりました。ここは、職員の情熱とバイタリティー。スタッフは少ないが、一丸となって作業をし、創刊号に漕ぎつけました。「だより」は、町史づくりの中で、町民との交流を深めていくとともに、編集状況を広く町民に知ってもらうことを目指しています。

▼町史づくりは、牛歩の如く確実なもの、を踏め固め、歴史を後世に伝えていく作業、と思います。「だより」は今回、史跡および写真紹介に重点を置きましたが、次回から資（史）料紹介も行う計画です。今後ともよろしく願います。



竹富町史だより 創刊号

平成4年3月31日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808 - 2 - 9985

印刷 八島印刷